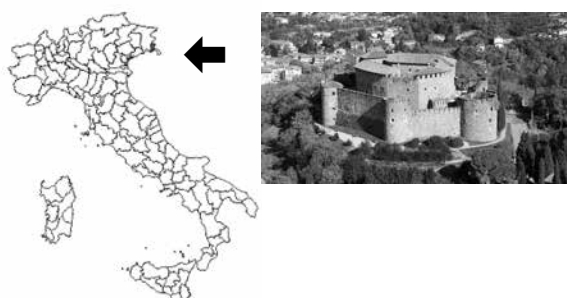


世界史から見た銘仙

井上直子*

[本稿は、2022年11月26日（日）に伊勢崎市紬の里において行われた、第3回セカイト講演会「伊勢崎の絹産業～蚕種から銘仙まで～」の記録を文章化したものです。]

今日は「世界史から見た銘仙」というタイトルで、銘仙が作られるようになった歴史的背景について考えてみましょう。旅の始まりは、私は伊勢崎の絹織物にはじめて関心を持った場所である、イタリア北東部のゴリツィアからです。



図版1 イタリア北東部国境の町、ゴリツィア

私は博士課程の途中で、イタリアとスロヴェニアとの国境にあるトリエステ大学に留学をして、そこから40kmほど離れたゴリツィアの校舎で「国境に關係する地域政策」などを学びました。ゴリツィアというのは、「南欧のベルリン」と呼ばれる、市街地が国境で分断されている珍しい町でヨーロッパではよく知られています。第一次大戦中はイタリア軍の前線基地がおかれ、周辺で凄惨な戦いが繰り返された町として、ヘミングウェイの『武器よさらば』にも登場します。私がこの町に興味を持ったのは、オーストリア＝ハンガリー帝国下にあった時代の遺

産である「多民族が共生する社会」が、イタリア編入後にどう受け継がれたか、あるいは断絶したのかを知りたかったからでした。

表1 ゴリツィアと養蚕

1850年代	フランスにおける微粒子病の流行
1860年代	イタリアにおける微粒子病の流行
1867年	帝国養蚕会議（ウィーン）
1869年	ゴリツィア養蚕試験場設立
1870年	第2回帝国養蚕会議（ゴリツィア）
1873年	佐々木長淳ゴリツィア滞在、試験場での研修 →実験器具の持ち帰り（顕微鏡を含む）に失敗
1874年	内藤新宿試験場養蚕試験掛の設置

ゴリツィアは先ほどの宮崎先生のお話とも関係があります。田島弥平が活躍していた時代、養蚕業や製糸業の振興に取り組んでいたオーストリア帝国は、最南端のゴリツィアをその拠点とし、1869年には養蚕試験場を設立しました。1873年に帝国の首都ウィーンで万博が開催された際に初めて日本も参加したのですが、そこで「日本館」の準備・運営を取り仕切った工部官僚がゴリツィアまで足を伸ばして、ヨーロッパの最先端の養蚕技術を学んだのです。

この工部官僚が旧福井藩士の佐々木長淳（ちょうじゅん）です。岩倉使節団の一員として欧米を回った大久保利通の考えで、この佐々木に「養蚕」や、あとで説明する「絹糸紡績」の技術を学ばせることになったのです。帰国した佐々木は、伊勢崎からも近い新町にある「絹屑糸紡績所」の設立を明治政府に献案しました。

私が絹糸紡績や伊勢崎について知ることになったのは、佐々木の名前がゴリツィアの文書館にあった

*いのうえ なおこ・城西大学経済学部 准教授



図版2 岩倉使節団
(右端が大久保利通)
クリエンス(ルツェルン)から
移入(大久保利通・佐々木長淳)



図版3 新町屑糸紡績所
1877年新町で最初の官営工場設立初期の絹紡糸は縮緬に使用工場の民営化と三井による経営

またスイスのルツェルン近郊の農村で絹糸紡績技術を学び、いったん帰国した後、ミラノの国際養蚕学会に参加しているということで、アルプスの周辺の養蚕業や製糸業の中心で最先端の知識を身につけたことが分かります。



図版4 オーストリア、イタリア、スイス、ドイツ周辺地図

佐々木がゴリツィアで学んだ「養蚕」については皆さんよくご存知だと思うのですが、もう1つの「絹糸紡績(屑糸紡績)」これは一体何なのでしょう？

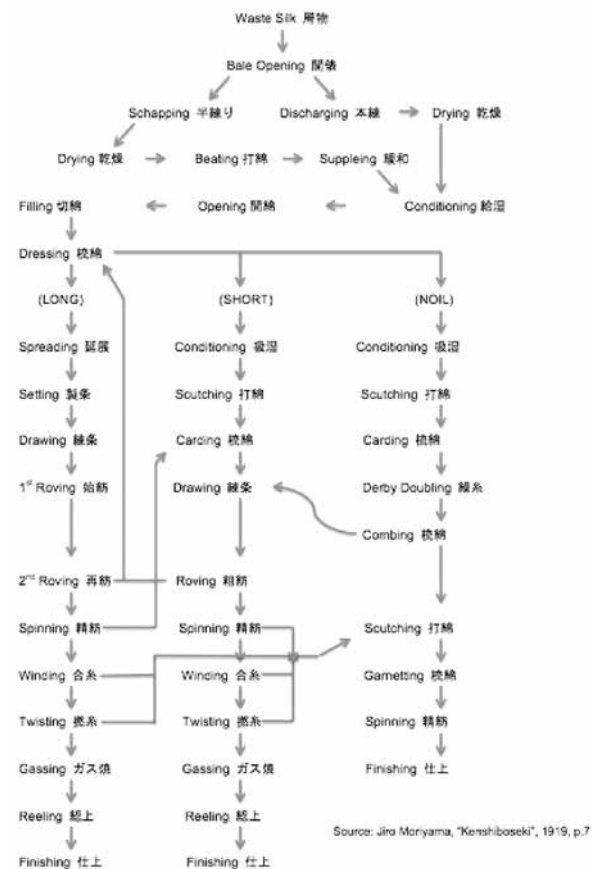
「養蚕試験場(1869年設立)」関連の史料に繰り返し登場したからでした。

図版4は現在のオーストリア、イタリア、スイス、ドイツを含む地図です。佐々木は、ウィーン万博への参加をきっかけに、現在はイタリア・スロヴェニア国境にある町ゴリツィアで養蚕や絹糸紡績を学びまし

一般に「絹糸」というと、繭から糸をとる「製糸」を連想すると思います。これに対して、「絹糸紡績」によって作られる「絹紡糸」と言う糸は、製糸の過程で出る屑や、繭の中でも汚れたり破れたり歪な形のもの、あるいはその毛羽や、太さが一定しない表面の糸などの長さを切り揃えた上で撚り合わせ、長く繋いで作る糸です。

この絹糸紡績は、絹を扱っているにも関わらず、綿や羊毛のような短い繊維で糸を作る「紡績」と言われる方法を使い、不均一な長さの屑絹を再利用するリサイクル技術でもありました(図版5)。この技術が日本にもたらされるまで、絹屑はただ同然の値段でヨーロッパに輸出されていたのです。

ところで、絹という繊維に対して、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか？ご覧いただいているのはルネサンス期のヨーロッパにおいて社会のエリート達によって着用されていた絹です。ご覧のようにプロケード(金銀糸を使った紋織)やベ



図版5 絹紡糸の製造工程



図版6 近世ヨーロッパと絹
 (左) エレオノーラ・ディ・テオドーロとその息子
 (アニョーロ・ディ・ゴジモ：1503-1573)
 (右) 教皇ユリウス2世 (ラファエロ：1483-1520)

ルベットの服は着ている人の権威や財力をよく表しています(図版6)。メタル糸で刺繍を施した絹の衣装は財産としての価値も高く、奢侈条例(贅沢禁止令)によって着用できる身分が指定されていました。こうした法律があるということは違反する人が多かったということでもあり、自分を少しでもよく見せたい、上の階級に見せたい、という気持ちは時代や地域を超えて普遍的な欲求のようです。

ともあれ、ヨーロッパにおける絹のイメージというのは、およそ民衆のものではなかったわけですが、これは原産地の中国でも日本でも同じことで、19世紀末まで一部のエリートが流通や消費を独占したのです。

その例外が紬です。近代的な機械を使わず、基本的には手で綿(わた)を紡ぐ「手紬テツムギ」はアジアでもヨーロッパでも、絹の歴史と共に古くから行われてきました。これに対して、ある時期から、機械を使って工場で大量に「絹屑の紡績糸」を生産する絹糸紡績(屑糸紡績)が行われるようになりました。その近代工場として最も古いものは、どこの国に作られたと思われますか？

答えはイギリスです。イングランド北西部ランカシャーという地域の町ランカスター近郊の村、ガルゲイトで1792年に設立されました(図版7)。ランカシャーというのは18,19世紀、当時はリヴァプールやマンチェスターを含む地域でしたので、まさにイギリス産業革命の中心地でした。狭義の産業革命

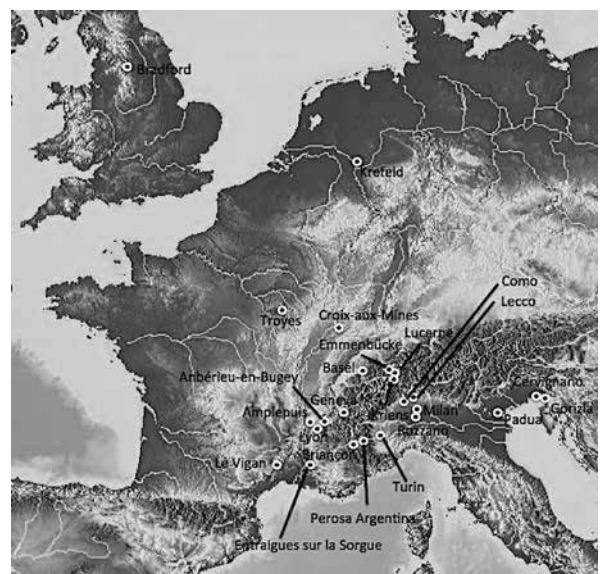


図版7 ガルゲイト絹糸紡績所
 (最古の絹糸紡績所)

というのは綿紡績の機械化を指すわけですが、このランカシャーで普及していた、綿や羊毛など短い繊維の紡績技術を用いて最初の絹糸紡績工場も設立したわけです。

これは大変、理にかなっていないと思いませんか。つまり、同じ機械、同じ技術を使って、同じ人が様々な種類の繊維を単独で、あるいは混ぜ合わせて紡績したのです。この後、スイス、フランス、ドイツ、イタリアなどの大陸諸国もイギリスに習い、絹糸紡績工場を設立しました。ちなみにヨーロッパのシルク・カントリー、フランスで復古王政が始まる頃(1815年)でも絹紡糸生産は生糸の2/3くらいはありましたし、19世紀後半になると半分以上、世紀転換期以降はほぼ絹紡糸のみ、となりました。

さて、この地図(図版8)を見ると、アルプス山



図版8 アルプス周辺の絹糸紡績 産業集積

脈の周辺に「絹糸紡績」の工場が集中しているのがお分かり頂けると思います。これはアルプスの水力を使って機械を動かしていたこと、豊富な水が必要であったこと、風通しが良かったことなどが絹糸紡績あるいは養蚕にとって重要だったということがあります。また、もともと養蚕や製糸、絹織を行っていたヨーロッパのシルク・カントリー、イタリアやフランスに近いという特質もある地域です。

このようにヨーロッパで早くから機械制絹糸紡績が広まったのは、18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパの先進工業国において、絹紡糸の必要性が認識されていたからに他なりません。

それは何故だったのでしょうか。その背景にあったのが「絹の大衆化」です。図版9にあるように、エリート階層を含めて、より安く、軽く、柔らかく、薄い布地が好まれるようになったのです。こうした嗜好の変化を促した要因として、18世紀頃からヨーロッパにインド綿が流入するようになったこと、またヨーロッパにおいてそれを模倣した布が生産されるようになったこと（アンディエヌの流行）が指摘できます。



図版9 絹の大衆化

「より安く、軽く、柔らかく、薄い服地を求めて」
・様々な繊維を混ぜる（絹、綿、羊毛、亜麻）
・絹紡糸の利用 ・機械化／標準化 ・大量生産
特に1860年代以降、
世界的に高品質から並質生糸需要が増大

その中でも、薄くて着心地の良いモスリンという種類の布を使ったドレスがエリート階級の女性の間で流行しました。これらの絵（図版10）は両方とも



図版10 モスリン（綿）・絹タフタを着る
フランス王妃マリー・アントワネット

フランス王妃、マリーアントワネットがモデルですが、身に纏うドレスの材質が異なります。右はフランスが国を挙げて振興していた絹のタフタですが、左はモスリンのドレスです。当時、国王や王妃は自国の産業を発展させるため、常にメイド・イン・フランスの絹を着用することが定められていたので、このハプスブルク家から嫁いで来た王妃は禁を破っているわけです。

図版11はナポレオン・ボナパルトの妻、ジョセフィーヌです。エンパイア・スタイルという胸の位置での切り替えが特徴的なこちらのドレスもモスリンです。このように18世紀にはインド産の薄い綿布の流入の影響で、ヨーロッパではより軽く、柔らかく、薄い布地が流行するようになりました。このような流行はやがて絹にも波及して、ルネッサンス期のプロケードのような重厚な織物は時代遅れとなるのです。

ここで「絹の大衆化」についてまとめておきます



図版11 モスリンを着るナポレオンの妻
ジョセフィーヌ

なぜ？

- ・ 18世紀消費革命
 新大陸やアジアからの奢侈品流入（珈琲、紅茶、タバコ、砂糖）→
 半奢侈の広がり（宮廷のドレスコードとしてのモード→）都市住民が自ら稼ぎ、消費するモード
- ・ 欧米における工業化（産業革命）
- ・ アジアとの直接取引拡大：スエズ運河の開削と安くなった原材料
- ・ ブルジョワに愛され大量消費された安くファッショナブルなシルクと他の繊維の混紡／混織
- ・ パリ・ロンドン・NYで次々と季節ごとに移り変わるブルジョワ・ファッション（1870～）
- ・ 手に届く大量消費材としての絹紡糸

図版12 「絹の大衆化」を推しすすめたもの

（図版12）。まず18世紀には、アジア物産がヨーロッパに流入し消費革命が引き起こされた結果、「重厚な装い」が時代遅れとなりました。同じく18世紀後半以降イギリスで産業革命が起こり、工業化が糸・布の価格を押し下げました。19世紀半ばに流行した微粒子病（ペブリン）の影響で繭の価格は一時的に高騰しますが、スエズ運河の開通による「対アジア輸送費削減」が実現し、その後、廉価化の流れは決定的となりました。その後、混紡や交織（まぜおり）、絹紡糸の利用拡大が季節ごとに移り変わるブルジョワ・ファッションの成長を後押ししました。

フランス革命以降、世界の「ファッションの中心」はヴェルサイユの宮廷を離れて、パリへと移動します。ここで新興ブルジョワを含む新しいマーケットを的にした「オートクチュール」の組織化が進みます。ヴェルサイユの宮廷では貴族たちが自分で布地や宝石をドレスメーカーに持ち込み自分のためのドレスを作らせたが、こちらのワースが行ったのは、デザイナーが前もってドレスを作り、そこから顧客に選択してもらってカスタマイズするという、合理的でデザイナー優位の服飾産業を作ることでした。

このように19世紀後半のパリで成長した服飾産業は、季節ごとに新しいファッション情報を発信するようになりました。当時の大陸ヨーロッパは産業革命真っ最中ですので、急速な「通信技術の発展」に支えられ、瞬時にパリの流行が世界中に届けられる

ようになったのです。流行の周期が短くなり、多くの情報が瞬時に消費されるようになると「差別化」、つまり人と違う格好をすることのハードルも上がります。人よりも新しい流行を取り入れることに貪欲な女性は、新しいシルエットのみならず、目新しい布地を志向するようになりました。

絹織物の流行の移り変わりについては、表2をご覧ください。19世紀最後の四半世紀において「特殊織」という、例えば穴が空いていたり、表面に凹凸があったり、レースやチュールなどの目新しい素材が大流行し、ドレス以外にも帽子や靴、傘などを装飾しました。このように絹の輝きを持ちながらも「安価」なフェイクファー、ベルベット、クレープ（縮緬）、ガーゼ、レースなどが大量に求められた時代に、その要請に応えたのが絹紡糸だったのです。

表2 パリのシルク・ファッションの流行

1870-76	タフタや他の平織が大流行
1876-1900	より安価な“特殊織”(tissus dits spéciaux/divers)の流行（ガーゼ、縮緬、チュール、レース、そして微粒子病の影響による絹価格の高騰を反映した綿、羊毛、などとの混織）
19世紀末	特殊織の輸出額が絹織物の輸出額を抜いた
1900-1914	20世紀も特殊織の流行は続いた（縮緬、ムスリン、ガーゼ、grenadine、チュール、レース、寒冷紗）

図版13は19世紀後半に流行したクリノリン、クリノレット、あるいはバサスルなどのドレスです。こ



図版13 19世紀後半に流行したドレス
左からクリノリン、クリノレット、バッスル

のように大量の布を必要とするドレスに、安価な絹紡糸はうってつけでした。またヨーロッパ人の室内装飾には織物がふんだんに使われます。居間や応接室の装飾には絹の輝きを持つベルベットなどが多用されました。絹紡糸の価格は19世紀後半のフランスで、生糸の5、6割程度でした。

絹紡糸が機械化される以前、18世紀後半のフランスでは絹紡糸がどのように使われていたのかを知るのに良い事例があります。これらは絹の町リヨンで活躍した職人、フィリップ・ドゥラサルという人の作品です（図版14）。これらのタペストリーには部分的に絹紡糸が使われているのですが、どの部分がお分かりですか？見た目ではなかなか難しいのですが、正解は「色の濃い部分」です。当時、絹紡糸を使用する理由は生糸より安価である、という1点でした。短い絹屑を撚り合わせている絹紡糸はどうしても生糸よりは輝きが鈍くなります。この欠点があるべく目立たない部分で使用されたと考えられています。ちなみに、このように絹紡糸を使った彼の作品はフランスのみならず、ロシアや近隣のヨーロッパの王室にも納められました。

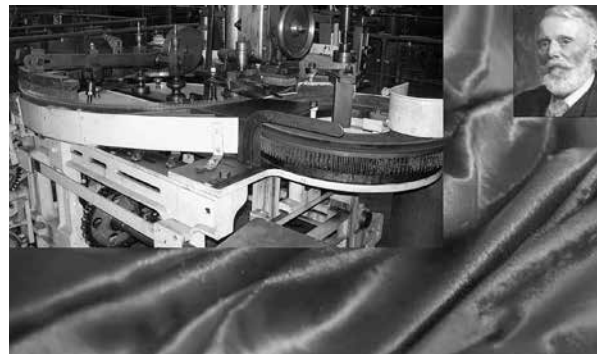


図版14 18世紀リヨンにおけるフィリップ・ドゥラサルの作品

次に紹介するのはサミュエル・カンリフ・リスターという人物です。彼は先ほどお話しした絹糸紡績の故郷ランカスターから70kmくらい離れたブラッドフォードという町において、絹糸紡績業で成功を収めました。というのも、彼がこの産業の全ての工程を「完全に機械化」することに成功したからです。そう聞くと「それまで機械化しなかったの？」と思われるかもしれませんが。ちなみに綿の産業革命自体は19世紀前半に一段落したのですが、絹糸紡績においては「コマ工程」の自動化が非常に困難でした。短い糸を除き、繊維の向きをしっかりと揃えてから糸同士を絡ませる工程は、綿や麻でも難しいのですが、絹は特にまっすぐで絡まりにくい形状をしていたため、切れにくく強い糸を作るのは困難を極めたと言います。

したがって、この技術を獲得したリスター社が大いに発展したのです。

図版16の機械はブラッドフォードの産業博物館に



図版15 19世紀半ばサミュエル・カンリフ・リスター（右上）の発明「ニップ・コム」



図版16 産業博物館に残るリスター・コマ

残るリスター・コマです。現在もしっかり整備され、動かすことができます。

それでは次にリスター社の商品（図版17）をご覧ください。当初はフラシ天のフェイクファー、ヴェルヴェット、プロケードなど、一見華々しいけれど、手に取ってよく見てみると少しチープなものを作っていました。先ほど申しましたように、特にベルベットは19世紀のヨーロッパで非常に需要が高く、リスター社の典型的な絹紡糸商品でした。絹紡糸がベルベットに使用されていた理由ですが、ビロードはパイルを切ってフサフサと表面を毛羽立てる特徴があるので、ベルベットの弱みである光沢の鈍さという弱点が隠しやすかったのではないかと考えられます。

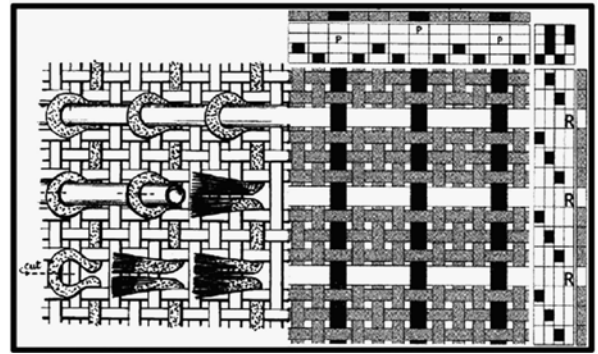


図版17 イギリス「リスター社」の絹紡糸を用いた商品

また図版18の図のようにベルベットの構造は非常に単純であり、新規に生産をする者にとってハードルが低かったのではないかと、というご指摘を生産者の方から頂きました。

このようにファッションの大衆化を支えてヨーロッパ中に広まった絹紡糸の生産は、イギリスからフランス、スイス、ドイツといったヨーロッパ諸国へ、さらにはアメリカや日本、中国にも普及しました。

ドイツではこちらのクレーフェルト（図版8）という町で絹糸紡績が広まるのですが、最初にお話した佐々木長淳を支え、彼と共にオーストリアやイタリア、スイスで絹糸紡績や養蚕についての調査を行ったドイツ人技師がこのクレーフェルト出身だったのは、偶然ではないでしょう。



図版18 ベルベットの基本構造

図版19はリボン産業で知られるスイスのバーゼル近郊で作られた絹製品です。スイスでは1824年に絹糸紡績工場が建設され、イギリス同様、早くから絹紡糸の使用が広がり、これらの製品にも絹紡糸が使われています。



図版19 バーゼル近郊で作られた絹製品

また図版20はフランスのサンティエヌヌで作られた高級リボンですが、バーゼルのリボンとの品質の違いがお分かり頂けると思います。

ここで前半のまとめをしておきましょう。18世紀から絹の消費が広がり、19世紀には「大衆化」が進みました。「大衆化」を背景に機械化で価格の下がった絹紡糸の消費が広がりました。こうして絹紡糸はヨーロッパにおいて新しい「ファッションの消費社会」を作ります。この絹糸紡績の技術は工部官僚によって日本にも移植されました。その背後にはヨーロッパの新しい消費社会について十分な知識を持つ内務卿、大久保利通の考えがありました。



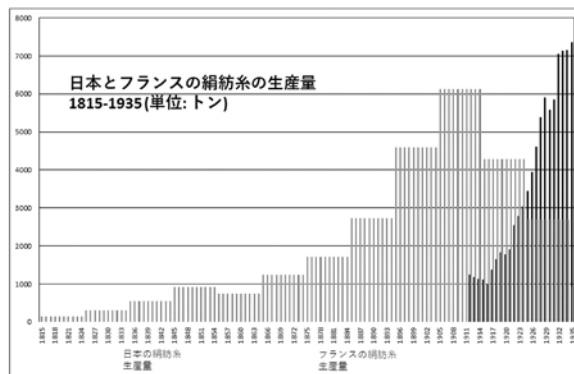
図版20 サン=テティエンスのリボン産業16-20世紀

ここからは後半、日本へも伝播した絹糸紡績が社会にどのような影響を与えたかをみていきましょう。佐々木によって1877年、新町で設立された官営絹糸紡績所ですが、当初、ここで生産された絹紡糸を使う機業地は多くありませんでした。操業当初は品質に問題がありましたし、何より「生糸と綿の中間」のような糸を使うことで、機業地の評判を落とすことを恐れたようです。絹紡糸に対する偏見を払拭するのは難しかったようで、すでに「実際に自分が着ている」のも知らずに見下す人が多かった、という新聞記事も残っています。

例外的に、当初から積極的に絹紡糸の使用を進めたのが丹後などの縮緬産地でした。強撚糸を使った縮緬は表面にボコボコとした質感があり、絹紡糸の欠点を隠しやすかったのかもしれませんが。丹後以外でも徐々に販路を広げた絹紡糸は、第一次大戦頃からぐんぐん生産量を伸ばしていきます。

図版21のグラフを見てわかるのは、歴史的な絹屑糸生産地であるフランスの生産量が1920年代半ばには日本によって追い抜かれているということです。日本に大きな需要があったことは間違い無いのですが、こうもやすやすとフランスが日本に追い抜かれたのは一体どうしてだったのでしょうか。その理由がわかるのが下の文書（図版22）です。

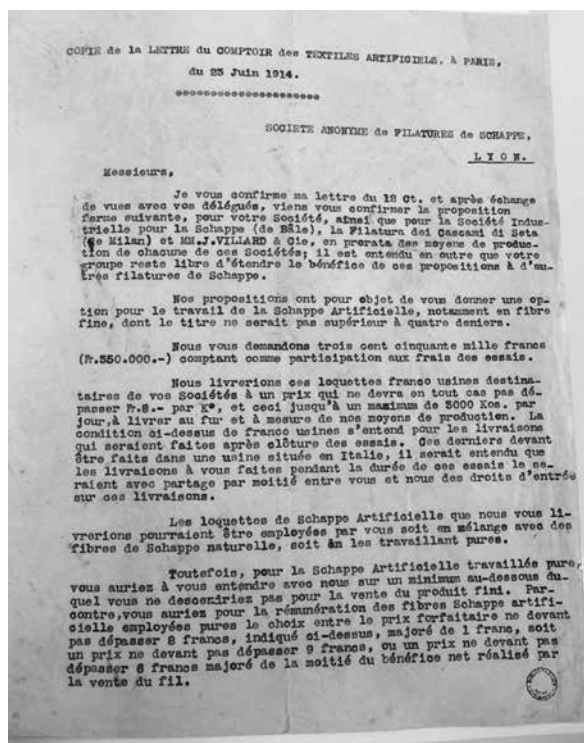
こちらはフランス、リヨンの絹糸紡績有限会社が、絹紡糸からレーヨンへ生産を移行することを決定した文書です。19世紀半ばには、フランス人の科学者シャルドネによって「絹に似せた繊維として」、最



(Source: Nihon Chuo Sanshikai, *Sanshi Nenkan*, 1934, p.196. MARKOVITCH, *L'industrie française de 1789 à 1964 - Conclusions générales*. Novembre 1966, pp.42-43. Regarding the data for French output, only the average amount per 10 years is available.)

日本に関しては「蚕糸業要覧」農林省蚕糸局, 1929, pp.56-59, 「蚕糸年鑑」日本中央蚕糸会,1934年, p.196を, フランスに関しては MARKOVITCH, *L'industrie française de 1789 à 1964 - Conclusions générales*. Novembre 1966, pp.42-43参照。

図版21 日本とフランスの絹紡糸の生産量

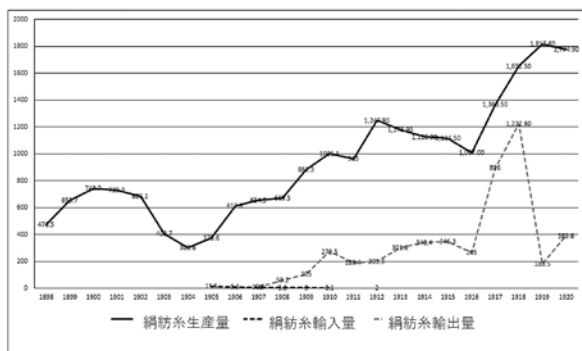


Lyon Soieries: Archives de la Société Anonyme de Filatures de Schappe de Lyon et de René Franc.1912-1933.(Chomarat Ms 0492) リヨンの公文書館にプライベート・コレクションを開放している Michel Chomarat氏の厚意により本史料の使用と内容の発表が許可された。Thanks to Mr. Chomarat who kindly leaves his private collection accessible to us at the city archive of Lyon, we can understand the context of the decrease of the French production of spun silk after 1920s.

図版22 リヨンの絹糸紡績有限会社の文書

初の化学繊維であるレーヨン（人絹）が開発されました。これは植物のセルロースを溶かして、酸の中で糸に成形していくものです。絹とは全くもって異なるわけですが、見た目の輝きと安く抑えられた価格が人々の心を掴みました。

次に、図版23のグラフを見て頂くと、黒い実線の日本の絹紡糸生産量が伸びているのに対して、グレーの破線の輸出量は第一次大戦後に下落しているのが分かります。これは内需が伸びたことを示しているわけですが、一体何のために絹紡糸は必要とされたのでしょうか。その答えが北関東の「銘仙」でした。



絹紡糸生産量に関しては日本繊維産業史刊行委員会『日本繊維産業史』1958年、p.939およびp.942を参照。貿易量に関しては大日本蚕糸会『日本蚕糸業史』1935年、pp.196-198および『日本繊維産業史』p.938を参照。

図版23 日本における絹紡糸の生産量と輸出量 1898-1920 (単位: トン)

江戸時代から北関東一円で盛んになった絹産業ですが、維新後も、機業地では太織（堅牢な着尺地）の生産を増やしました。良質な糸はまず輸出に向けられ、残った低質の糸や屑糸を地元で消化したからです。絹紡糸を緯糸に使った緋の着物は、銘仙と呼ばれ名を変えましたが、当初は「地味で堅牢なイメージ」があったようです。

世紀転換期に伊勢崎など北関東の機業地で発明、開発された「解し織」の起源については諸説あるようですが、フランスのシネ織との関係が想像されます。京都の勸業留学生だった近藤徳太郎がリヨンなどヨーロッパ各地で織りや絹糸紡績などを学んだ後、栃木の県立工業学校初代校長となったことはご存知かも知れません。「ほぐし織」の特許自体は東



図版24 フランスのシネ織りとの関係

京で1908年（明治41年）に取得されていますが、多くの消費者に愛用されるようになるのは大正末期から昭和初期（1920年代から30年代）にかけてです。その頃には、伊勢崎において「絹紡糸を使った着尺（きじゃく）地」が好評であることを知った秩父などの機業家も、伊勢崎から入手した絹紡糸を使用するようになりました。当時、絹紡糸の価格は生糸の半額程度だったと言います。

このように関東一円で作られるようになる銘仙も、当初は「華々しくモダンなイメージ」とはかけ離れていました。転機になったのは1907年、日露戦争の英雄、乃木希典が院長を務めていた学習院の制服に、本来地味だった「銘仙」を採用し、華族の子女が多い「生徒の華美な身なり」を正そうとしたところにあるようです。しかしその結果、「銘仙」の方がどんどん派手になるという結果を招きました。デパートや雑誌の宣伝もあって、その人気は高まる一方で、1914年の段階で既に、植物をモチーフにした派手な大緋に人気があったことが分かっています。

大正末期1920年台半ばになると、婦人雑誌（図版26）にも銘仙の特集記事が組まれるようになり、産地ごとの違いなども具体的に説明されています。当時の婦人雑誌は、ファッションの詳細を解説するのみならず、西洋文化を幅広く紹介しており、女性の「生き方」「暮らし方」の規範を示しているのが印象的です。

銘仙がどれほど人気だったかを表している調査の結果が図版27です。

昭和初期、東京屈指の繁華街で女性の8割方が銘



図版25 主婦の友 (1917-2008)

- ・全ての女性のために
- ・新聞より詳細な流行記事を掲載
- ・新しい消費社会を反映 (ファッション, 旅行, 家庭用電化製品, スポーツ/テーブルマナー/建築などの西洋文化)

- ・1925年
銀座や日本橋三越の前を通る女性の50%が銘仙着用
- ・1928年
その比率は84%まで上昇

銀座三越 (杉浦非水, 1930)

藤森照信編『考現学入門』筑摩書房, 1987年 (初出は1930年), pp.124-128.

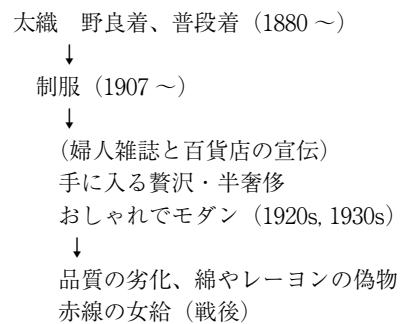
図版26 全ての女性のための銘仙



By Seiho Kaburagi, Ashikaga, 1931



By Kiyoshi Kobayakawa, Ashikaga, Around 1935



図版27 銘仙のイメージ変化

仙を着用していたというのは驚きです。

ここで銘仙のイメージが時代を経てどのように変化したのかをまとめておきたいと思います。

野良着としても着用できた太織が、20世紀初頭に女学生の制服として取り入れられ、婦人雑誌と百貨店の宣伝を経て、「手に入る贅沢」あるいは半奢侈として人気を博し、1930sにかけておしゃれでモダンなイメージを確立したのです。その後、綿やレーヨン、あるいはプリント銘仙などの偽物が広がり、戦後は全く異なるイメージが定着します。

さて、現在「銘仙」は世界的にも認知度が上がっています。特にモダンで奇抜な柄の銘仙は、欧米の企画展で紹介されたり、メトロポリタン美術館やヴィクトリア&アルバート博物館において常設展示も



図版28 ローマ日本文化会館での銘仙展（2016年）
La Sfavillante Moda Kimono Moderna

されています。海外コレクターの需要が高まっている現在、どのように地域でその価値を認識・共有し、流出や劣化に抗うか、また地域の価値創造、ブランディングに結びつけていくのか、難しい舵取りが求められています。

それでは最後に、今日のまとめをお話しして終わります。産業革命の始点であるイギリスにおいて紡績技術の機械化を完成させた「絹糸紡績」は、ヨーロッパと日本の双方において「絹の大衆化」をもたらしました。その結果、北関東で生まれた銘仙は、日本に新しい消費社会、意匠の西洋化、ファッションの大衆化をもたらしました。粗製濫造されるようになった「銘仙」は、綿やレーヨン、ウールなど、またプリント地でも作られるようになり、イメージが劣化していきました。

ご清聴ありがとうございました。



セカイト講演会「世界史から見た銘仙」